

大谷探検隊将来染織資料とトルファン・アスターナ古墓群被葬者の関係 ——第1号被葬者付帯の錦綾の年代考察を軸に——

廣谷妃夏(東京国立博物館)

東京国立博物館が所蔵する染織品には、現在の中国新疆ウイグル自治区トルファン(吐魯番)出土品とされる一群が存在する。20世紀初頭に京都・西本願寺が中央アジアに派遣した調査団である大谷探検隊が収集したと考えられており、収蔵時の受入記録と、染織品を挟むガラス面に付された付箋には、「第1号」から「第10号」までの番号が記される。この番号は吉川小一郎(1885~1978)と橋瑞超(1890~1968)を中心とする第3次大谷探検隊(1910~1914)が、現在のトルファン市近郊アスターナ古墓群で収集した、麴氏高昌国から唐西州時代の被葬者を指すと考えられる。これらのミイラ化した被葬者は、1914年に吉川が日本に携帰したものの、ほどなく、西本願寺法主を辞任した大谷光瑞(1879~1948)の大連への転居に伴い、多くが中国に再び移送され、現在は旅順博物館に保管されている。残念ながら、染織品を含む多くの出土文物や文書は、この時期に東アジア各国の博物館や民間に分散し、現在に至るまで大谷探検隊将来資料の全体像は把握されていない。このような状況のなか、東京国立博物館所蔵トルファン出土染織資料は、被葬者との紐づけが比較的明らかである点で重要といえる。本発表では、まず「第1号被葬者」に付帯するとされる錦綾等の染織資料の文様・組織に注目する。その考察をもとに、被葬者と年代の特定を図り、服飾史上で重要となる着用状態や、埋葬状況についても試論を提示する。

最初に、本論の前提となる被葬者番号と染織品の関係について確認する。発表者は2023年7月に中国・旅順博物館で第3号・第5号被葬者の実見を行なった。その結果、東博所蔵の被葬者衣服断片と、各被葬者の衣服や副葬品に用いられている染織品の特徴が一致したことから、付箋に記された被葬者番号の信頼性を認めた。旅順博物館(当時は関東庁博物館)における清野謙次氏の実見報告(1930)によれば、第1号被葬者は女性であり、顔に錦と平絹が付着し、衣服は絹で、身体の外側は錦と薄物で覆っていたという。発表者は、第1号の着衣断片とされる《茶地幾何花文錦》と《赤地渦輪違文入鳥獸人物文綺》に注目し、その制作技術と文様の特質を、アスターナ古墓群出土の類例と比較して分析する。さらに、第1号被葬者に付帯する他の染織資料と併せて検討した結果、概ね6世紀後半から7世紀前半の人物である可能性が高いと指摘する。以上をもとに、大谷探検隊収集の墓表のうち該当する年代、性別のものと照合を試みる。発掘状況に関する橋と吉川の言及を勘案し、現時点では、高昌延昌4年(564)の年紀をもつ、徐寧周妻金城張氏の墓表の可能性を提示する。本発表をもとに、染織資料の方面から大谷探検隊将来品研究を補完し、今後改めて、出土文書、出土文物及び探検記録を総合的に精査する一助とすることをめざす。